

## エッセー

## 再びボストンを訪れて

剣物 修\*

5月5日午後8時20分、定刻にやや遅れてボストンのローガン国際空港に着いた。11年振りのボストンである。チェルノフ先生がターミナルまできてくれているはずである。11年間お互いに会っていないので、果して見付けることができるかという不安は、背すじの伸びた昔と少しも変わっていないハービー（チェルノフ先生のこと）を見付けて、すっとなでしまった。「オサム!!」「ハービー!!」と男同志が抱き合う様は日本では仲々見ない光景であろう。30分程で荷物を受け取り、彼の車で夜の空港をあとにした。スマートンネル（ボストン港の海底を走る）を抜け、ダウンタウンを走り、チャーレス河のほとりを通り、ボストン大学のキャンパスを経てブルックライン市のハービーの家に着いた。11年前に、私が2年間の留学を終えてボストンを離れる直前に引越したところで、私もお手伝いしたことを思い出した。ここにいたって11年前のでき事はまるで昨日の事の様に思われ、タイムトンネルを通り抜け、期待と不安に満ちていた若き日の留学生活の真直中に引き戻されたような錯覚に陥ったのであった。今回のボストン行き目的はもちろん SCA に参加することであったが、ハービーとの再会、2年間の生活を楽しんだ古いアパートの訪門やかつての留学先のタフツ大学麻酔科での講演は、自分にとって又別の意味で重要であった。ジェット・ラグの影響もあったが、11年目の再会に興奮し、12時を過ぎても話しはつきなかった。

3日目の学会の終了後、地下鉄カブレイ駅からグリーンラインでコモンウェルス街を経てハーバート通りで降りると、右角には酒屋が在り、左角にはピザハウスがあった。なにかも懐かしい日々と同じであった。ハーバード通りを左折して一本目、ブレイナー通り130番地が目指すアパートである。あの時ですでに80年以上もたっていた

という古アパートで、新しく建て換えられているものと想像していたが、玄関は修理されてはいたものの、私の住んだ4階の部屋の半ばくずれかけたベランダと共に、これも又昔のままであった。この屋上からダウンタウンの夜景を楽しんだ日々が懐かしく思い出されたし、夜中に窓を開けるとどのアパートの窓にも学生が勉強をしている明りがともっていたのが印象的であった光景は今でも変わっていなかった。その夜、「オサム、電話だよ」といわれ、受話器をとると、かつて研究室で助手をしていたキャシーからであった。この11年間クリスマスカードの交換を続けていたし、今回の事は出発前に知らせておいた。明日一緒に食事をということで、ハーバートスクエアで6時に逢うことにした。ボイルストン駅からレッドラインの終点で降り、階段をかけ登ると彼女が待っていた。頭の毛は少し白くなりかけていたが、昔の面影ですぐわかった。今、ハーバード大学院生で細胞生化学を専攻、すっかり学者らしく成長していた。ハーバートクラブで食事をし、食後酒にいささか酔いながら、夜の更けるのも忘れて互いに若き日の思い出とこの11年間のでき事を語り合った。いつの日か、日本を訪門したいとの希望をできることなら叶えてあげたいと思った。

地下鉄パーク通りの東口を出るとワシントン通りの真中にあるデパート（ジョルダン・マーシュ）の前にいた。ここを右に700メートル位いった所にタフツ大学病院があるはずである。通りの左右にある店の名前のはほとんどは見覚えがあった。この病院は2年前に新しく近代化され、昔の古い病院は一部しか残っていなかった。171ハリソン街がこの病院の正面玄関であったが、なんと病院はこのハリソン街をまたがって建てられていた。麻酔科は5階で中央手術部、外科、ICUも並んでいた。受付で名前を言うと、レイノルズ教授（小児麻酔）は心外の麻酔に入っているので手術室にきてほしいとのことであった。昔の手術室に比較

\*北里大学医学部麻酔科

して広々としかも良くデザインされた超近代的レイアウトには目を見張るものがあった。小児麻酔を厳しく指導して下さったレイノルズ教授との再会も嬉しかった。お互いに握手した手をしばし離すことができなかつたことには沢山の思いがこめられていた。レジデント、スタッフを相手に「カルシウム拮抗薬と麻酔薬の心筋収縮性に及ぼす相互作用」と題しての約1時間講演中恩師は一番前でじっと耳を傾けてくれ、質問もしてくれた。この大学で始めた仕事を今も続けているのだという実感が思わずこみ上げてきた。当時一緒に仕事をした仲間はレイノルズ教授を含めて3人しかいなかったし、教授自身もあと2年で退官とのことであった。退官後にでも日本を訪れてもらい、日本の麻酔を見てもらいたいと思っている。

ボストンでの1週間は実に短かった。シンフォニーホール、美術館などには全く行く時間がなかったのは残念であったが、それ以上の収穫があ

ったものと信じている。ボストンを離れる前日、ハービーにお礼の気持をこめて、レストラン「ピア・フォー」で夕食をすることにした。この一週間、食事は全てハービーの手造りであった。50歳を過ぎててもいまだ独身を貫いている彼は料理の腕も大したもので、毎日ハービースペシャルを楽しませてくれたのである。このレストランはボストン港の第4埠頭にあるニューイングランド地方で最も大きなシーフードレストランとして日本でも有名なところである。2ポンドもある大きなロブスターやクラムの蒸したものに舌つづみを打ちながら、かつてここでマサチューセッツ麻酔学会が開催されたことなどを思い出していた。近いうちに日本かボストンでの再会を約束して、1週間生活を共にしたハービーと別れ、12日午前7時40分発のノースウェストオリエント便でボストンをあとにした。

第5巻・第1号(昭和59・4月) 正誤表

頁	行数	誤	正
83左段	↑ 9	髓 (活字不良)	髓
93左段	図6 (右上)	白丸欠けている	○
103左段	↑ 25 <sup>(文献)</sup> <sub>10</sub>	D-gluco-	<u>D-gluco-</u>
116	↓ 2	図4	図1
138	↑ 4	教	数

↑: 下段より ↓: 上段より